

現地レポート 01

# 沈下橋建設と暮らしの変化

ミャンマー連邦共和国 マグウェ地域 タイエツ地区

タキン橋（橋長 178 m うち 36 m マグウェ地域政府が予算負担／幅員 4.3 m）

タイエツの町から南西に車で約 30 分、パプツ村にタキン橋は架かっている。2018 年度の事業で建設されたタキン橋は、25 村、約 63,000 人に裨益する。この辺では、落花生、豆、米、玉ねぎ、雨季にはゴマなどを栽培している。

この地域の雨季は 4-7 月くらいまで。これまで雨季の間は、ボートに乗って河川を渡っていた。バイク 1 台につき 1,000 チャット<sup>1</sup>、人は 500 チャット支払っていた。水量が多いと渡れなかったのが、待たされることも多かったそうだ。

一度にバイクは 4 台しか乗らないボートであったが、その当時はありがたく感じていたという。しかし今は沈下橋が完成し、安全かつ金銭的にも時間も有効に使えるようになったと喜びの声が聞かれた。では、ボート業をしていた人は失業したのかと村長の U Thein Myint (53) に尋ねると、それが本業ではないので問題ないよと笑われた。

雨季はボートだけでなく、牛車に乗って渡ってもいたそうだ。収穫物などを市場に出す場合、牛車に載せて河川を渡し、トラックのある場所に着くと、また積み替えなければならず、たいそう時間がかかった。沈下橋のおかげで雨季でもすぐに出荷することができるようになり、農家にとって大変ありがたいと感謝の声が何度も聞かれた。例えば今だと、村の収穫物の落花

執筆・撮影者紹介

兵頭千夏さん

ヤンゴンを拠点に、ミャンマーの人々の生活・伝統文化・信仰・女性をメインテーマに撮影している写真家。2003 年よりヤンゴン文化大学に 2 年間留学し、ミャンマー語の通訳者、翻訳者としても幅広く活躍しています。

今回、JIP の沈下橋建設事業がミャンマーの人々の暮らしをどのように変えたのか、現地の撮影や住民へのインタビューを通して、レポートをしていただきました。



タイエツの町からパプツ村に向かう

生などをピーの町に4台、タイエツに4台、毎日8台が沈下橋を渡っている。ちなみに近隣25村には車が20台あるそうだ。

沈下橋が完成したことで、経済面だけでなく、保健面の不安も解消されたという。妊婦の容態が悪化し、町の病院に緊急搬送が必要となった時、それが雨季で水量が多く激しい場合は、筏に乗せてひっぱり、車まで筏を皆で担いでいたそうだ。蛇に噛まれる人もパプツ村だけでも毎年2-3人おり、他村もいれると14-15人になる。雨季の場合、河川を渡るのに時間がかかり死亡率が高かったが、今では1時間ほどで搬送できるようになり多くの命を救っている。

パプツ村を流れる河川は雨季の時だけでなく、一年を通して少量だが水が流れている。そのため毎年、雨安居が明けの10月頃に村人たちで村の竹や木材を伐採し、鉄を使ってバイクが通れる橋を造ってきた。雨季が始まると流れてしまう橋だが、早く雨季が始まり雨量が多い年は、2度橋造りをするこもあつたという。沈下橋が建設されたことで、もう村人総出で橋を造る必要がなくなった。労力と金銭的負担がなくなったと感謝の言葉が聞かれた。

約4ヶ月にわたる沈下橋の建設時には、パプツ村の村人が中心になって活動をしていた。例えば、どこで良い資材が入手できるかなどアドバイスもしたそうだ。毎日、80-100人が作業していたが、村人10人も作業員として、1日8,000チャットで雇われていたそうだ。コンクリートを敷き詰める時などは手早く作業をしなければならず、人手がさらに必要になるので、大勢の村人が働いたそうだ。その場合でも1日7,500チャットもらえたので臨時収入が得られてありがたかつたとの声が聞こえた。自分自身が作業し、近くで見っていたので、この沈下橋は堅固だと断言できると胸を張っていた。実際、沈下橋に大きな破損や問題は起きていない。



タキン橋の全景



パプツ村からタイエツの町を望む



車が来ると端に寄る子どもたち



橋の下をボートはくぐれるが  
牛車は行交えない高さ

裨益する 25 村には 18 の学校があるがパプツ村には高校がない。村から便利な場所にある高校はタイエツの町中なので生徒たちは寮暮らし生活になる。週末になると沈下橋を渡って村に戻るのだが親は子どものことが気がかりでよく食事を届けるのだそうだ。雨季でも、沈下橋のおかげですぐにバイクで届けることが出来るようになって嬉しいという声が聞かれた。

中学分校の校長 U Htoo Aung Chit (34) の話では、4 割の教師が沈下橋を利用して学校に通っているそうだ。大雨が降って、帰宅できなくなった教師たちもいたという。もうそのような心配もなく、大変ありがたいと感謝された。

同行してくれた DRRD<sup>2</sup> の U Ko Ko Min が沈下橋建設までの経緯を話してくれた。この辺は水の流れるが毎年変わるの、河道について建設の 1 年前から調べていたという。そして、政府の予算でボックスカルバートを 2 箇所建設した。それでも河道は変化し、沈下橋を長く建設することになったという説明を受けた。雨季になると堤防の侵食が激しく、政府の予算で沈下橋近くに石を積み、護岸工事をしていた。政府は来年度、4 月以降にさらなる護岸工事をおこなう予定。U Ko Ko Min は「沈下橋の建設は難しくない。河道を把握するのが難しい」と何度も言っていた。

沈下橋には手すりがないため、子どもたちが落下しないか心配なところ。U Htoo Aung Chit 校長に、学校ではどのような指導をしているのか尋ねてみた。校長は、車に向かって歩くようにと指導していると。これまで橋から落下した児童生徒たちはいないそうだが、今後ルールを決め、朝礼などで常に話をするようにしたいと話していた。

家庭ではどのような話しているのか 2 人の息子の母親 Daw Win Yee (37) に聞いた。水汲みが大変なので、子どもたちと一緒に河川で水浴びをしているのだそう。「毎日、自転車に乗って橋を渡っています。橋のおかげで早く行けるようになりました。息子らは橋の



護岸工事の説明をする

DRRD の U Ko Ko Min



収穫物の出荷も沈下橋のおかげで楽になった



車の往来が増えた



パプツ村の村長 U Thein Myint と  
銘版

地覆に座って話しをしたりしてますね。車に気をつけて、橋から落ちないように、ふざけないでと言いつけています」と言っていた。

パプツ村の U Thein Myint 村長に、沈下橋の維持について確認した。牛車の車輪外縁には鉄が巻かれているため橋面を痛めないよう、雨季以外は沈下橋を利用させていないようだ。牛車道を渡らせている。水位が上がった時に流れ着いたゴミや流木などは村人たちが団結して速やかに除去しているとのことだった。

沈下橋完成後の雨季は、橋面よりも水位が上がってもすぐに引いたので、橋を利用できなかった日はなかったようだ。生活が楽になったと何度も感謝の言葉が聞かれた。

## 所感

沈下橋建設事業は現地ニーズに沿っており、妥当性は高く、JIP が掲げる上位目標は達成されていた。沈下橋の建築は効率よくおこなわれ、村人たちから信頼を得ていた。近隣住民の生活環境は飛躍的に向上し、負の影響はなく、経済的・社会的に高いインパクトが見られた。

持続性という意味では、牛車に対する通行禁止をおこなう程度であり、橋維持委員会といった組織作りを提案したい。橋建設委員会に女性は参加しておらず、ジェンダーの観点から見て、積極的とは言えない。また、安全指導がきちんとおこなわれているとは言い難く、配慮が欠けている。

毎年、自助努力で建てる橋のために村の木材を伐採していたが造る必要がなくなり、金銭的にも環境面においても改善された。

懸念事項は、浸食が護岸工事により食い止められるかという点。沈下橋に悪影響が及ばないよう働きかける必要を感じた。

同事業は、地域住民のインフラを改善し、社会経済活動に貢献する意義ある事業であったと思われる。



水量が増えた時に使用する  
通行止めゲート



多くの村人が集まり意見を聞かせて  
くれた



ボックスカルバート

<sup>1</sup> ミャンマーの通貨単位。1,000 チャット≒70～80 円。

<sup>2</sup> ミャンマーの建設省地方道路開発局 (Department of Rural Road Development) の略称。